

歌の下には土がくだける。

號外

一年 茨木英一

チリン／＼／＼／＼

鈴の音

町の隅までひびいてる

白いはちまき

黒い足袋

號外まき／＼走つてる

チリン／＼／＼／＼

鈴の音

新聞屋のおつさんが

汗をびつしより

かきながら

號外入れ／＼走つてる

チリン／＼／＼／＼

鈴の音

それ號外が大勝利

信陽城がかんらくだ。

漢口陥落

一年 原田勝

「忠勇無双の我が軍が  
バイアス灣に上陸す」

新聞あけた其のとたん、

目をどり出た大きな字

それから過ぎた十餘日

早くも廣東陥落だ。

廣東落ちて、漢口が、

つづいて落ちた十月の

忘れもしない二十五日、

街にあふれた戦勝の

氣分が旗に提灯に

嬉しい繪巻をひろげてる。

兵隊さんよ、ありがたう。

日本男兒だ、此の僕も、

大いに勉強致します。

負けずに國につくします。

短歌

新しき筆もて書きぬ新本に第二學年と大き文字にて

新入の一年生に敬禮をうけて嬉しき二年なるかな

中學の五つの段を一つ昇りいよ／＼ます／＼つとめんと思ふ

襟章の目になりたるうれしさを鏡を前にながめ入るかな

城山の鐘の音變らず我は今日二年になりて變る教室

新學期東洋史をばくりひろげ讀み入る窓に春風の吹く

新二年そと答禮のけいこをと弟相手にやつてみるかな

うからどちまなびのには一とせの石つみ上げし今日のうれしさ

一年間毎日見たる大銀杏今日は二年の顔で仰ぐも

櫻咲く頃ともなりぬ我が襟のローマ數字も目と變りたり

通信簿もらつたこれで二年だぞにこ／＼顔にて本買ひに行く

占領の聲たかまりて夜の空に紅をむる提燈の行く

傷兵の白きハンカチ振れるまゝ遠くさびしく消えてゆく汽車

二年

松杉 松原 義丈 照夫  
久保 川 泰  
松浦 久 隆  
横野 信 之  
小森 弘  
堤谷 正 一  
一脇 眞 治  
川脇 眞 治  
秋川 喜久 男

獸々と奉仕してあり汗のまゝにわれら銃後の護かくとぞ  
 せみの鳴く木に近かよれば異なる木に又もせみなく夏の午後かな  
 生ひ繁る松の林の木の間よりもれ聞え来る山蟬の聲  
 池の面に魚の動きのほの見えて夕日はげしく夏の水にあり  
 言葉なく歸へり來ましぬ軍人永久にたゝへんそのいさほしを  
 汽車の窓にほかりと映りし兄の笑顔見送りに来てよかつたと思へり  
 乳母車小さい手に持つ風船のぶつりと切れて秋風に舞ふも  
 答案のすらく書けし嬉しさよ心明るく教室を出づ  
 朝明けの露に濡れたる草花の一つ／＼が輝きてをり

聖戦の苦難の道は遠けれど希望の光り大いなるかも  
 口に言ふ責務の大を日と夜の實地に示せ青年學徒  
 遺家族の畑に賑ふ諸團体日の丸辨當ひるげのむしろ  
 肌寒き秋の夕に祈るかな我が皇軍の武運長久  
 日の丸を小手にかざして幼な子の母に手引かれゆく祈願祭  
 戦線のニュースとなりて夕食の話の聲もひたと止りぬ  
 この月をきつとはるかかか戦場で兄も見てゐるこゝちするかな  
 皇國の威力を此處と風立つ天かけりゆく銀の荒鷲  
 武装して故郷出で立つ従兄と言葉少くなに握手かはしぬ  
 勇ましく征けよますらを我もまたとて日の丸ふり見送りにけり  
 ひむがしの神の國なる島根より今ぞ平和の曙光見えけり  
 雨の朝吹雪の夜のへだてなく村のやしろに鈴のひびける

父上の芽をおろされし菊咲きぬ次の便りにそへて送らん  
 我一人泳ぎ出でたる沖合の水のつめたさ何故かうれしき  
 いちゞくの葉かげに見ゆる青き實に秋のめぐみをしみ／＼と思ふ  
 音もなく水の流るゝ川の邊にこぼろぎ鳴けり朝まだ早き  
 喘ぎつゝ山路を辿る我頬に涼風軽く吹きなで來る

灯ともして靜かに居れば枕邊の障子に虫の這ふ音のする  
 暮れて行く空をわたりて遠方につれ立ち向ふ鳥のむれあり  
 空やけて波赤々と照りはゆる島影遠し帆をおろす舟  
 樂しくも今日一日を送りたりのだかに泳ぐ鱒を見てあり  
 待ちかねし兄の便りの北支より届けばしほしきとめく我家  
 夏の夜の月の光りに照りはえて寄せては返す磯のさざなみ  
 のどかなる春を迎へぬこのころ、皆皇軍の御蔭なりける  
 外征の勇士の心くみわけて吾が踐む道をあやまりなせそ

かにかくに蟬の聲々無かりせばいかに涼しとあが思ふらん  
 風もなく暑さ底ゆくまひるなり地震起るてふきざしなるかも  
 釣糸にまつはる鮎の影透きてあたり靜けし芹川の下  
 爆音につきて見上ぐる大空を白く光りて浮雲流る

二年

久米正男  
 國友武夫  
 川北和幸  
 加藤和忠  
 馬場健三  
 中川恒夫

三年

秋草和子丸  
 藤井正泰  
 望月正夫  
 西村與一  
 小池與一  
 吉田正雄  
 清水正二  
 北村一三

四年

泉巖  
 寺村武藏  
 北村仁三  
 染川仁三

五年

土田榮三  
 小林茂雄  
 寺村道夫  
 河崎敏男  
 尾本一雄  
 三坊東三  
 中澤宏

高田善之助

俳句

何處行く雁の聲なる時雨月

母を憶ふ心の淋し秋の夜

秋月や忠魂塔をたゝえつゝ

アンテナに雀止りけり霜の朝

白と黄の小菊を胸に遊ぶ子等

ひようんゝと野分につて舞へる鶯

濱に出てむしろひろげて涼みけり

夏の夜や燈臺は光る赤と黄に

冷やかに秋霧流れ案山子かな

軒につる岐早提灯のゆるきゆれ

ラヂオ体操の下駄の音合ふや夏の朝

夕顔や何處か秋らしき心地して

勤勞奉仕草堀れば蹴にバツタかな

勤勞の晝食や足に蟻が這ふ

高原の明け初めて蟬のしきりなり

日くれんとして時雨るゝ如し蟬の聲

遠雷をきゝつゝ庭に水を打つ

二年 加藤 忠

堀 光 一

北川 和 幸

國友 武 夫

石原 龍 英

新 木 蕃

堤 庄 一

鍛冶 誠 一

擴聲機優勝戦の人だかり  
漢口に馬嘯くならん秋の空  
菊咲きて亡き父しきりに戀し

秋高し犒軍に急ぐ人の波

石投げし川原水あり冬の月

濱の砂ざくゝと踏む夕涼み

手枕のしびれに醒めし晝寢かな

雷や鬼の子ふらせ鈴鹿山

新教科書買つて歸るや櫻花

若草に朝日照り居り新學期

新 木 蕃  
秋口喜久男

川 瀬 德 之

藤 田 行 三  
柴 田 和 秀

三年 藤 井 泰

寺 田 慶 造  
中川原金一

村 田 大 三  
清 水 正 二

山川の色秋ながら暮れてゆく

戦勝や菊の香高く晴るゝ庭

月を背に家路をたどる父とわれ

聲をあげて何を歌はん春の山

心地よき青葉山かけ我は食む

落梅の音今朝の小雨にて

蟬の聲寢の耳にきゝなれて

鈴虫のなき初めたり家の窓

海かけに入道雲のたゞならぬ

皇軍の武威と仰ぐや初日の出

皇軍の武運祈るや初詣で

戦線の便や野良へ送らるゝ

淋しさや城山の鐘秋の風

稻こきの音高らかに日は暮るゝ

俄雨我家をひどく叩きけり

君幾つ僕はこれだけ貝拾ひ

新涼、濱を廻りて街に出る

軒端に傘のならべり五月晴れ

水させば金魚涼しく亂れけり

献納のまぐさを干すや日の暮き

三年 小南 欣 一

濱 中 光 覺

白 坂 正 勝

木 下 勉 三

青 木 實

染 川 仁 人

桐 田 豐 正

北 村 一 三

北 村 一 三

北 村 一 三

北 村 一 三

北 村 一 三

四年 黒田 寛 道

林 榮 一

北 川 鐵 男

杉 田 喜 貞

土 田 榮 三

宮 戸 弘

古池の隅より出でゝ初蛙

岩清水落つる雫の青き色

勤行の朝ひぐらしのすだくあり

秋風に内簾の藻の皆動く

すゝ風におちさうにして行く螢

打水の後や蚊遣の香のしるき

風鈴の今宵も夏を惜しむ歌

川上に鮎つる人の見え隠れ

水仙の三株に春の立ちにけり

幾柱喪の凱旋や夏寒く

召集にもれて畑打つ男子哉

雪止んで道一杯の子供かな

父君の足跡を踏む雪の道

黙禱の人に社頭の櫻散る

病兵の平癒を祈る初詣

森 徳 太 郎

巖 佐 耕 三

吉 田 謙 一

吉 田 謙 一

吉 田 謙 一

吉 田 謙 一

吉 田 謙 一

吉 田 謙 一

田 口 志 津 夫

横 井 聖 山

横 井 聖 山

横 井 聖 山

中 澤 宏

中 澤 宏

中 澤 宏

中 澤 宏

高 田 善 之 助

高 田 善 之 助

一 谷 道 雄

一 谷 道 雄

一 谷 道 雄

一 谷 道 雄

# 故千原先生追悼特輯

◇はしがる

千原輝一先生には昭和十三年十月六日、漢口攻略の激戦に當り第一線にあつて御勇戦中、不幸敵弾のため壯烈なる最期を遂げられました。昭和十二年八月二十六日召に應じ、支那事變に出動されてから一日も休むことなく、各地に轉戦百戦を嘗められ武功顯著なるものがあつたのであります。私共は先生の華々しい御凱旋の日を待つて親しくその御勞苦を懐ひ感謝してゐるさういふ心を告げたいの、只管先生の武運長久を祈つてゐたのであります。が今日は最早それが出来なくなりました。

普通ならば、先生には未だ御年も若く多分に明るい未來が應いてゐたのです。それにも拘らず、先生には今回の事變に際し、天皇陛下のため自ら進んでその生命を希望なさ、げられました。洵に獻身報國、われらのため來るべきより良い世界創造の尊い礎石となりました。私共はこの悲報を耳にして聲をあげて泣きました。御遺骨を迎へて慟哭致しました。あ、然し、悲しい先生の面影は今呼べど答はまされけれど、先生の御魂はいや高き靖國の神と光り給ひ永久に滅びぬ道徳の鑑ともいふこともなされたのです。

私共は先生の遺志を學び、強大な御心に觸れて、涙を拭うて一段と平時の勇氣を培はねばなりません。本誌は本誌に於て先生追悼の微衷をさ、げたく、誌上記念碑の心を以て校葬次第其の他を録することに致しました。

## ◇故陸軍砲兵大尉千原輝一先生告別式記事

戦死

昭和十三年十月六日 北支〇〇省〇〇縣〇〇〇〇高地附近の戦闘に於て戦死。十月十四日放課時先生の嚴父より入電、後日

部隊長より壯烈極まる戦死の詳報あり。

校葬準備

昭和十三年十月十四日、訃報入電即日職員會席上學校長教職員に傳達、翌十五日朝禮に於て生徒に之を報す。同日學校長急遽京都なる遺族宅を弔問す。一部職員同上。十一月二十四日遺骨歸還近しとの事にて校葬に關し打合せを行ひ、香花料、通夜、校葬方式、案内等の大略の決定を見る。十二月十日葬儀委員を定む。總務係、式場係、受付來賓係、遺族係、通夜係、記録寫真係、調度係、生徒係等各分擔を定む。

十二月二十三日 學校長は田中書記を帶同、遺骨の凱旋を神戸港に迎へ、同日全校職員生徒遙拜を行ひ黙禱をさ、ぐ。翌二十四日更に詳細に實行案を協議す。

次第

十二月二十六日 學校長等聯隊葬に參列、遺骨捧持遺族と共に歸校、

午後三時、全校之を彦根驛に迎へ、市内長順寺に奉置、讀經、施餓鬼、御通夜、同夜、同窓會主催慰靈祭

十二月二十七日 午前八時五十分遺骨を本校講堂に迎へ、同九時四十分より校葬（神式告別式）を舉行、全校・同窓會・來賓參列禮拜。午前十一時四十分遺骨本校出發全校見送、

十二月三十日 學校長並に平井教諭、御郷里の村葬に參列。

二十六日記

十二月二十六日午後三時五分京都に於ける聯隊葬を終るや直に近親者、學校長、平井教諭、川村教師、田中書記等に護られつゝ彦根驛に到着、總務係堤教諭並に通夜係、驛構内に迎へ、少時驛長室に安置し、やがて川村教師（陸軍中尉）に護持せられ驛正前に進む、儀仗の第五學年生徒捧統して之を迎ふ「吹きなす笛」の喇叭、哀々の調を以て響き渡る。驛頭には第四三學年生徒をはじめ國防愛國兩婦人會員、青年學校並に市内各中等學校各小學校職員生徒等堵列して御英靈を迎へ、遺骨は肅々として冬寒き驛前通りを進み、御通夜會場なる市内鷹匠町長順寺に向ふ。行列順序左の如し。

筒井教師先驅。銘旗一四年生野村捧持。花輪三箇。儀仗隊一小隊（五年）。僧侶。御遺骨一川村中尉護持。御宵影一平井教諭捧持。遺品。學校長。遺族。通夜係。儀仗隊二小隊。（五年）。同窓會員。名譽職。其の他。愛國婦人會員。國防婦人會員。第四學年生徒。第三學年生徒。會場なる長順寺出先の街頭には第二學年生徒第一學年生徒蜿蜒と堵列し悲しき御凱旋を迎へ奉り、暗涙に咽びつゝ順次行列に加はり、長順寺境内に入る。



無言の凱旋

午後三時半、御英靈は長順寺堂内正面祭壇に安置され、同寺住職施主となりしめやかに施餓鬼を行はれ、一同参列し、午後五時前に終り、生徒、一般参列人次第に下向解散す。  
 施餓鬼に引續き、同窓會主催の慰靈祭に移り、御遺族、本校教職員、同窓會員、特に嘗て野球部員たりし卒業生並にその父兄、本校現野球部員等大凡二百人参列し勤行焼香弔詞等嚴肅盛大に營まれ、哀情切々涙新たなるを覺え、午後六時終了す。  
 同夜は關係有志多數參會通夜に入り故人生前を語り遺勳を偲び冥福を祈りつゝ夜を更し夜を徹す。  
 因みに先生遺族としては嚴父御令弟御令息、未亡人の方々遙々と來彦遊されたるなり。

告別式

千原先生告別式は校葬を以て十二月二十七日午前九時四十分より、嘗て先生が壯途を歓迎せし式場たる講堂に於て嚴修せり、同日及び前日。之に備へて各係は準備萬端手配怠りなく。定刻各々部署に就き、全校生徒は午前八時三十分校門前に堵列して御英靈を迎ふ。學校長及び平井教諭御遺骨を護持し、御遺族之に隨ひ肅々として到着。正門弔旗哀し。式場は入念に清掃し、正面壇上に祭壇を用意し、正面に對し左側には喪主、近親者、學校長、齋主、齋員及本校職員のを設け、右側は來賓、同窓會員一般參會者席と定め生徒は堂内中央及後部階上を當てたり、

遺骨は正面祭壇に遺影と共に安置しその前に遺品を配置し右側に「故陸軍砲兵大尉千原輝一先生之柩」と墨淡く大書せる銘旗を立て兩側に大神を供へ右に各方面より贈られたる夥だしき花輪を以て飾られたり。

午前九時二十分生徒一同入場引續き諸員入場午前九時三十八分既に式場立錐の餘地なく而も莊重嚴肅の氣に満ち、同四分北野神社々司後閑繁次氏を齋主とし、伶人の奏樂によつて開式さる。

式次第左の如し。

故陸軍砲兵大尉千原輝一先生告別式次第

昭和十三年十二月二十七日

滋賀縣立彦根中學校

先合圖（午前九時四十分）

- 次 職員 生徒 着席
- 次 來賓 着席
- 次 遺族 着席
- 次 祭主 着席
- 次 齋主 以下 着席
- 次 修禱 席
- 次 開奠 幕
- 次 齋主 祭
- 次 祭主 弔詞
- 次 來賓 弔詞
- 次 生徒 總代 弔詞
- 次 奏樂

次 玉 串 奉 奠  
 次 祭 主  
 次 齋 主  
 次 遺 族  
 次 來 賓  
 次 生 徒 總 代  
 次 撤 饌  
 次 閉 幕  
 次 祭 主 閉 式 ノ 挨拶  
 次 順 次 退 場

奏 樂

以上

祭 詞

故陸軍砲兵大尉千原輝一 大人告別誄詞  
 此乃神床爾暫時置据奉利安米奉留故陸軍砲兵大尉千原輝一 大人命乃御亡駭乃御前爾北野神社々司從七位後閑繁次謹美氏誄言申  
 左久大人命波明治三十八年七月二十餘五日京都府何鹿郡物部村千原延之助主乃長男爾生出給比其性温順爾志想高久學校爾在氏  
 波常爾儕輩爾優禮氏學乃術秀氏給爾其穎敏支心爾見留所也有氣幸大正十三年三月京都府立福知山中學校乃業乎卒閉昭和二年三  
 月姫路高等學校文科卒倍同五年三月京都帝國大學文學科乃業乎卒給比同五年四月姫路高等學校講師乃囑托乎受良比同六年二  
 月陸軍幹部候補生登志氏野砲兵第二十二聯隊爾人里給比同十一月期滿知氏聯隊乎離禮同七年三月滋賀縣立彦根中學校教諭爾任  
 良衣同八年三月砲兵大尉爾任良衣正八位爾叙世良衣給比去年八月大命乎畏美徵良氏砲兵第二十二聯隊爾入給比今年九月砲兵中尉  
 爾任良衣給比能久下乎率比導支慈愛深久坐志都禮婆部下乃軍人等波更奈利教子等皆親登母兄登母親美懷支氏君賀爲爾盡左幸事乎樂

美合倍利伎大人命波又能久親乎助介氏專良家乃業乎母阿奈々比給比夫婦乃中美志久稚子乎左倍儲介氏家乃内愈儼比睦比氏安久樂志  
 久明加之暮志給爾里志乎此度乃戰役爾從比給比氏波敵乃堅壘乃南京乃戰比次々爾奮比戰比進美氏敵乎打退介種々乃苦乎忍比様々乃  
 難爾堪閉氏勳功乃數々乎顯波之給比志乎此乃神無十月六日北支河南省商城縣沙窩東樓高地附近乃岩乎攻米給布登皇軍乃先登爾進  
 給比氏奮比戰比給爾利志折志母敵乃打彈丸乃碎爾痛手乎負給比氏雄健比志都々唯時乃間爾可惜玉乃緒波絕衣給比奴阿波禮悲志支哉  
 悔志支哉敵波今南爾北爾皇軍乃縵布行手乎支倍敢倍受一日々登逃加禮退支力盡支心挫氣氏終爾服從奉良半母乎佐々遠支爾波有良奴  
 乎其乎待知敢倍給波受戰乃道乃中空爾志氏空志久成給爾留波憤呂志母悔志止母言乃葉乃盡須倍支爾非受今御亡駭波遙々止守奉里戴  
 支奉里歸里氏此乃彦根中學校乃講堂乃最中爾爾齋奉里親族家族友垣教子等御前爾寄集比高支御勳功乎仰支悲支御蹟乎偲奉里御前爾  
 心計里乃種々乃味物時乃花乎母供奉里御心慰米奉良久乎平爾安爾聞食志各々母別乃言葉告奉里露乃玉串捧奉良久乎多爾爾宇豆奈  
 比給比嚴志御靈波今母皇軍乃先鋒乎守奉里氏天翔國翔里氏皇國乃鎮米護神登仕奉里給布御靈乃幸爾依里氏戰乃事速介久平終倍氏畏  
 支大御心乃任爾東洋浪平爾内外乃國人安久樂志久諸共爾在祭衣幸事乎仰乞比都々永支御別乃式仕奉良久止大人命乃一世乃事乃蹟  
 乎言舉介誄比奉良久止白須

祭詞終つて、祭主、學校長の式辭あり。

式 辭

昭和十三年十二月二十七日 滋賀縣立彦根中學校校長正五位勳五等足立芳之助職  
 員生徒一同ト共ニ茲ニ謹ミテ故陸軍砲兵大尉千原輝一先生ノ靈ニ奠ス。  
 嗚呼先生本校教諭現職ノ御身ヲ以テ皇師ニ班リ聖戰ノ陣頭ニ立チ鐵馬長劔ヲ揮  
 ツテ砲煙彈雨ノ場ニ馳突セラル、コト實ニ一年有二箇月、終ニ命ヲ行間ニ授ケラ

ル吁、壯ナル哉。コレ一ニ先生ガ英風偉烈ノ因ルトコロ王事靡鹽ノ效ストコロ。然リト雖モ又一タビ先生ガ計ヲ聞イテハ衷心惻々。傷心痛惜、眞ニ言フベカラザルモノアルナリ。

伏シテ惟ルニ先生天資洵ニ温厚寛仁、渾然タルコト美玉ノ如ク、加之俊邁穎悟夙ク文教報國ノ大志ヲ抱持セラレ、姫路高等學校ヲ經テ京都帝國大學文學部ニ入リ以テ國文學ノ蘊奧ヲ究メラレ、昭和五年出デテ擢ンデラレテ母校姫路高等學校講師ニ補セラレ、同六年野砲兵第二十二聯隊ニ入營軍務ニ携ハリ昭和七年除隊後ハ直ニ本校教諭トシテ就任セラルルニ至ル。爾來今日ニ至ルマデ六箇年間維持確實偏ニ本校生徒ノ薰化ニ盡瘁セラレ、ソノ間主トシテ國語漢文科ノ教養ニ専心セラレ、一方校友會野球部並ニ雜誌部ノ理事トシテ之ガ統理督勵ニ任ジ、ソノ眞摯ソノ謹恪生徒ヲ鍾愛セラルルコト殊ニ深く、ソノ敦厚高義ヨク同職ノ間ニ偕和シテ誘掖提撕至ラザルナカリキ。而シテ昭和十二年夏、支那事變ノ勃發スルヤ間モナク御身軍籍ニ在ルノ故ヲ以テ率先應召ノ事ニ際ス、實ニ八月二十六日ナリ。先生奮然起ツテ身命ヲ君國ニ靖獻スル正ニ此ノ秋ニアリトナシ、征衣颯爽勇躍シテ上途セラル。本校職員生徒一同乃チ歡送ノ式ヲ舉行シ壯途ヲ彥根驛頭ニ送ル。嗚

呼ソノ御英姿今ナホ髣髴トシテ險間ニアリ。大呼歡送ノ聲今猶耳底ニ存スルナリ。

以來先生ニハ三國部隊ニ屬シ、九月十二日京都ヲ出發シ一路浩波ヲ蹴ツテ北支天津ニ上陸セラレ、京漢津浦線中間地帯ノ野ニ從征シ、後鋒ヲ轉ジテ大連ヨリ上航シテ白卯口敵前上陸ニ參加シ南京攻略戰ニ勇戰苦闘シ、更ニ奧地ニ進ミテ黃河ノ濁流ト闘ヒツツ徐州ノ大會戰ニ轉ジ、本年八月ニ至リ青島ヨリ上航シテ復ビ楊子江ヲ溯リ安慶ニ上陸シ、直ニ大別山山脈ノ陣地ニ進發セラル。而シテコノ間特ニ最モ困難ニシテ且最モ重要ナル步砲連絡ヲ確保スルノ衝ニ始終セラレ、常ニ一身ヲ危地ニ曝シ武勳炳乎トシテ顯著ナルモノアリシト言フ、任所ノ辛苦如何バカリナリシ實ニ察スルニ餘アルナリ。ソノ大別山進發後ニ於ケルヤ頑敵死守ノ據點武漢攻撃ノ事ニアリ。先生ハ常ニ最前線ニ挺身シテ部下ヲ指揮セラレ、勇奮激戰數次數十次、赫如タル軍功枚舉ニ遑アラズ。

カクテ昭和十三年十月六日沙窩ノ激戰ニ奮迅中、不幸敵迫擊砲炸裂ノ禍ニ中シ果敢悲壯終ニ大義ニ殉セラル、ニ至ル。時正ニ漢口陷落ノ直前ニシテコノ事アリ先生ノ無念幾許ナリシカ洵ニ惜ムヘシ悲シムベシ。

嗚呼。馬革以テ骨ヲ裹ムハ先生ノ夙ニ期セラレシトコロナランモ、我等ノ先生

ニ冀フトコロハ然ラズ。事収マリ四顧歡喜ノ凱旋ノ日ニ武勳ノ先生ヲ迎ヘテ親シクソノ警咳ニ接センコトヲ願ヒシナリ。吁今ヤ先生亡ク我等ガ旦暮只管先生ノ武運長久ヲ祈願セシモ空望ニ歸セルカ。誰カイフ將相春秋ナシト、我等ノ先生ニ俟ツトコロハ前途多年ノ後ニアリ、先生ヤ春秋ニ富ミ有爲令才、天ノ付託ハ實ニ當來ニ在リシナリ。然ルニ既ニ亡シ嗟、春華未ダ全ク芬芳ヲ發セザルニ狂風枝ヲ折リ、秋錦色猶淺クシテ疾風梢ヲ拂フノ憾ミハ正シク先生ノ上ニアリ、惜ミテモ惜ミ足ラズ、歎キテモ歎キ及バズ、哀哭更ニ已ムナシ。

翻ツテ之ヲ先生ノ御遺族即チ御兩親御令閨御令息ノ上ヲ思フ時、衷心切々情禁ズル能ハズ、陳ベント欲シテ言到ラズ痛恨極リテタゞ暗然タルアルノミ。

顧ミルニ先生ノ生前ニ於ケルヤ本校教育ノ上ニ念慮セラル、特ニ深甚博大ナルモノアリ。野戰匆忙ノ間屢々書ヲ寄セテ、御身邊ノ左右ヲ報ジ、時局下ノ生徒ヲ鼓舞激勵セラレタリ、而モ而シテ最後ニ躬行命ヲ致シ以テ日本精神ノ大活ヲ示現シ給フニ至レリ。警醒之ヨリ大ナルハナク、寔ニ本校々訓タル至誠奉公ノ國士ノ權化タリ龜鑑タリ。彦中教育ノ上ニ永ク昭々無量ノ明德ヲ垂レ給ヒヌ。

今ヤ皇軍ハ海陸空ヲ壓シテ向フ處風靡セザルナク、戰局ノ面目革リテ敵勢日々

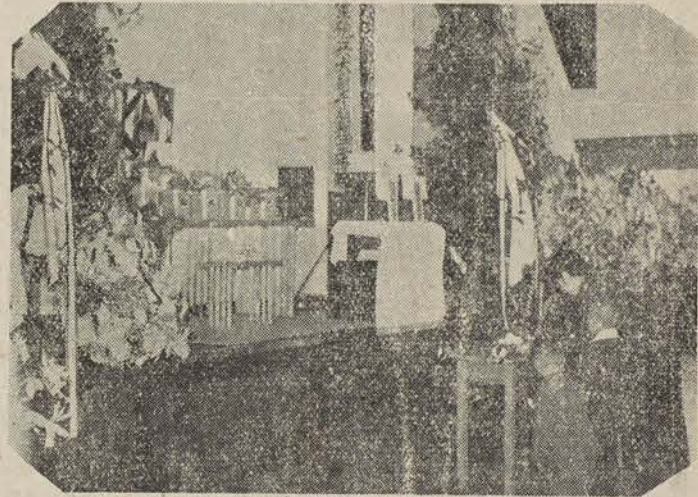
ニ戚マリ、蔣介石麾下ノ國民軍終ニ守リヲ失シ新東亞建設ノ機至レリ。コレ偏ニ畏クモ、大元帥陛下ノ御稜威ノ下ニ先生ノ如キ護國ノ英雄ガ聖血ノ賜ト謂ハザルベカラズ、而シテ今日之ガ欣ビヲ共ニセント欲スルモ幽明路異リテ呼ヘド應ヘ給ハズ。

嗚呼、記セヨ。長江ノ波永ヘニ先生ガ弔歌ヲ奏シ沙窩ノ丘先生ガ忠血ニ染ミテ土塊紅ナルヲ。冀クハ彦中ニ學ブノ諸子、先生ガ遺烈ヲ敬慕シ先生ガ遺志ヲ嗣ギ以テ後代ニ傳ヘ、蹶起一番君國ニ挺身シ大陸ニ活躍シ、先生ノ今日ヲシテ無窮ニ泯滅スルナカラシメンコトヲ。

本日永訣ニ際シ感慨千般、言、辭ヲ成サズ。辭、意ヲ竭サズ。タゞ誠心正意ヲ披瀝シ聲淚ヲ盡シテ先生ノ冥福ヲ禱ルアルノミ。在天ノ英魂尙クハ照鑑シテ之ヲ饗ケヨ。



哀音切々縷々又惻々胸破るゝの思ひあり。朗調時に頓し、參列員一同愁新に加はり歎息まざるものあり。次いで懇ろなる來賓の弔詞（別録）ありひとしく故人生前の功績を稱へ壯烈なる戦死を痛悼し、最後に生徒總代の弔詞に入るや眞情溢れて聲涙共に下り、講堂の全校生徒に嗚咽の聲あり、弔辭終つて堤教諭弔電數十通を捧げて進みて朗讀し引續き玉串奉奠に進む、故先生が遺兒喪主延一君の令夫人に支へられて靈前に進まると依々たる哀姿言辭を絶して終に堪ふべからず、かくて徹饌奏樂を経て十一時十分を以て了し。學校長の挨拶ありて一同退場す。因みに千原家より贈られたる神饌は之を生徒に頒與す。



御遺族玉串奉奠

告別式後、午前十一時四十分御遺骨は近親、學校長、平井、小松原兩教諭等に護られて出發歸還の途に就かる。第三、二、一學年生徒は正門前に第四、五學年生徒は驛前に堵列して、英靈安かれと念じ入りつゝ永訣の心に弔送す。彦根驛發午後〇時十三分、小松原教諭は全校を代表し遺骨に隨行して京都に赴くあ、英靈は故山に向つて影なく層雲低迷し來つて環堵寂然として聲なく、生徒は黙々として歸途に就き、校狹茲に滞りなく終了す。

弔送

生徒作文 校葬記

〇

五年 豆子 清 一

十二月二十六日、我々五年生は武装して、四年以下は徒手にて彦根驛前に整列、御遺骨の到着を待つてゐた。緊張してか或は寒さのためか体がふるへて仕方がない。空は薄黒い雲にて掩はれ寒風は容赦なく一同の銃を持つ手を凍えさす。

午後三時五分列車着、御遺骨が驛頭に現れた。自分は眞心を籠めて號令を掛けた。「捧げ銃」と。アツ、御遺骨を捧持して居られるのは、眼鏡を掛けておられるが、何と川村先生ではないか。千原先生と川村先生は、忘れもしない昨年八月二十六日講堂に於ける歡送式を受けられ、同時に共に勇躍御應召なされたのだ。それに千原先生は最早此の世の人にあらず、川村先生は名譽の御負傷こそされたが、今日は共に歡呼に送られて出發したその友、千原先生の遺骨を抱いて、再び彦根の驛頭に立たれたのだ。戻つて來られたのだ。あゝ何たる運命のかなしさぞ。喇叭手の吹奏する吹きなす笛の悲曲が身も心も吸ひ取つて行くが如く、寒風にあふられて驛頭を霧の如くに流れ行く。早や眼がしらは熱く涙にみるう御寫眞も御遺骨も正視する事か出來ず、指揮刀に付けてある黒いリボンは、はた／＼と手を打つて更に涙をさそふ。

儀仗隊として我々五年生は、御遺骨の前を御守りして長順寺に向つた。道の兩側に竝んだ教へ子の敬禮を浴びて、千原先生の御靈は驛前の鋪道をしづ／＼と歩いて行かれる僕達は今日始めて、先生の御遺骨の行列に加はつて、何時も驛前に竝んで御迎へする時とは全然異なつた、何十倍、何百倍もの深い、何とも言へない感激に浸つた。彦根の人々は、我が千原先生の御戦死を悼んでゐて下さるのだ。皆の人が我が恩師の忠義に對して、感謝の意を捧げてゐて下さるのだ。先生の名譽は我が彦中の名譽だ。先生の英靈よ皆の感激が、感謝が、判りますか。見えますか。噫先生には判るとしても見えずとしても、我々は先生の御温顔をこゝに再び拜する事も出來ず、唯先生の御遺骨を御守りして、黙々と歩いてゐるのだ。悲しむまいとしても悲しい。泣くまいとしても泣ける。自分の心を如何とも統御することさへ出來ず、足の動くまゝに進んで行く。

次第に道幅が狭くなつて行くに従つて、自分の心も次第に壓し縮められる様に苦しく、前に行く人々の涙でぬれた道を歩んでは更に涙を流し、長順寺の門をくゞつた。黒白の幕で圍まれた境内は彦中生だけでぎつしりだ。

本堂の内部は線香の煙で薄暗い。御遺骨は今夜一晩此の寺に安置され、先生達や野球部の者で御通夜が営まれるのだ。勝手口より出入りする野球部の先輩の方々も悲痛の感が顔色にうかがはれ、何となくそはくとしておられる。我々は先生の遺骨に對し今日の御別れを告げて學校へと歸途についた。

二十七日早朝、寒氣肌を刺す京橋上に整列、先生の御遺骨を御迎へした。御遺族、校長先生、平井先生、小松原先生に守られて故先生の御遺骨は、自動車にて影の如く、我々の目迎裡に通り過ぎ、消えるが如く石垣を曲つて行かれる。これより我々は朝禮隊形に竝んで講堂に入った。正面には千原先生の御寫眞と御遺骨が黒幕の後ろに安置され、右側には多くの花環がかざられ、左側には新鮮な神饌の品の數々が並び上壇の左には先生の御遺品が置いてあり、戦地に於ける先生の御活躍がしのばれる。來賓各位の入場についで神官、御遺族が入場され式が始まつた。先づ開幕があり奏樂裡に供物が壇上にはこぼれた。その笛の音は、悲しみの淵に沈み行く調と聞えた。高い音より低い音へ移り行く時の悲しさ、何とも言ひ表はずすでもない。校長先生の式辭に自分は泣けた。校長先生の聲が震へてゐる。生徒一同の啜り泣く聲がする。唯悲しいと言ふより外はない。自然と涙が出て床上に落ちるあゝ何故泣くのか。唯悲しいのだ。來賓方の弔詞、弔電の披露をして生徒總代として自分の弔詞を讀む時が來た。先生の御寫眞を間近に拜するや、急に心が落付いて來た。しかしそれも束の間、讀み始めてより先生御戦死の有様の所に來るや、言よりも先に涙が走り、字はほんやりとして讀み難く、多くの來賓の前で取亂して泣いてはならぬ、しつかり讀めど心には言ひきかせながらも、なほ出る聲は涙聲となる。あゝ、天なる哉、命なる哉。自分にはあらん限りの誠を盡し、四年親聞く教を受けた生徒等の感謝の限りを籠めて讀んだ。我々全生徒の受けた御恩に對する盡し切れない御禮の少しでも言はうとあせりつゝも、唯立派な先生をうしなつた悲しみで、夢中のうちに讀み終つてゐた。席にかへつても、後から後から出て來る涙を如何ともし難く、にぎり拳でふるひとつた。續いて玉串奉奠があり、神饌は徹せられて、千原先生と別れる時は來た。黒幕が掛けられるや、先生の靈魂は我々より遠くへと離れて行かれる様だ。先生よ、僕達が先生の仇討をする迄はどうかざつと見てゐて下さい。先生きつと我々は仇を討つて見せます。

午前十一時四十分、四、五年生は驛迄先生を見送つた。小松原先生に抱かれて、先生の御遺骨と我々は最後の、無言の挨拶をした。平井先生が持つて居られる先生の日本刀は、石や土で削られた様な痕がいくつも残つてゐる。あゝ先生があの軍刀をさげて彦根を出發されたのは去年の八月であつたのに早くも先生の御身は消えうせて、軍刀のみが残らうとは。我々は

先生が此の軍刀をさけて凱旋なさる日のみを待つてゐたのに。あゝもう言はないでおかう。涙を誘ひ出すばかりである。ポーツと言ふ汽笛と共に先生の遺骨は二等車にゆられて彦根の地を去つて行かれた。永遠の旅路に――。

四年 松田 信

十月中旬千原先生の戦死の報を得て茫然として悲しみに沈んでから二ヶ月餘、漸く十二月二十三日無言の凱旋をされ、今日二十三日學校で告別式が行はれたのである。

去年夏先生の御出征に際して私達に「私はこれから行つて参ります。日本人としてこれに増した光榮はありません。」と元氣に別れの御言葉を下さつて御出發になり、私達は驛に先生をお送り申し上げ、萬歳を絶叫して、以來先生の御武運の長久をお祈り申し上げ、一日も早く晴れの凱旋をされ、再び教壇にお立ち下さる様念願して居たのに、それに今日は喪章をつけて、先生の告別式に参列しなければならぬのか。と思ひつゝ、式場に入る。

式場の正面には白い幕が張られて、中央に先生の御寫眞が悲しく黒い幕で覆はれ、左右に神、前には種々の供物が供へてある。來賓の方々が續々と入場される。修祓が行はれる。式場はしんと静まり、御幣を振る音がサツサツと嚴かに聞える。燈が点ぜられ、音楽が始まり、先生の御寫眞を覆つた幕が取り除かれる。先生の御魂を此處にお招き申し上げるのである。神官の祭詞を讀み上げる聲が幽かに、悲しく響く。千原先生が戦死せられたのは夢としか思はれぬ。

校長先生が式詞を朗讀せられる。じつと頭を下げて耳を澄ませる。と先生の御聲がしめやかに聞える。――ひるがへつて御遺族の上に思をいたすとき――と先生の御聲はふるへて終は殆ど聞えない。一生を教育に捧げようとの先生の御志を遂げさせられず、業半ばにして軍務に墜られた先生の御無念、御遺族の方々のお悲しみは如何許りであらうか。と思ひ、目頭の熱くなるのを感じる。式場は水を打つた様に靜かである。去年先生を彦根驛に歡送申し上げた時、あんなに元氣に出發せられたのに、今日ではもう世界を異にして、先生の御姿をも御聲をも拜する事も聞くことも出来ないのだ。あゝ！ そつと顔を上げて正面を拜すると、おゝ千原先生が正面の壇の上に立つてゐられる。はッとして我に返る。撮影の電氣閃光器の光が強く目を射たのである。校長先生の式詞の朗讀は終つて居る。

來賓の方々が弔詞を朗讀せられる。何れも先生の御跡を偲んで弔ひの詞をお述べになる。最後に在校生代表の弔辭の朗讀である。――今も猶先生の御聲が室の一隅から聞えて來る様に思はれてなりません――と哀調を含んでひびく、じつと唇を

かしみめる。誰一人身動きする者もない。來賓席では、白いハンケチがちら／＼と見える。燈が唯一つぼんやりと、先生の戦死をいたむが如くボンヤリと光つてゐる。

弔辭の朗讀が終ると玉串の奉奠が行はれる。席が後の方である爲殆ど見えない。玉串の奉奠も終ると、再び音楽が奏せられ先生の御寫眞は黒い幕で覆はれた。斯うして、千原先生の告別式は嚴肅に滞りなく終つた。

千原先生は身を以て國に殉じ、私達に「至誠奉公の國士となる」範を垂れ給ふたのである。私達は、先生の最後の御言葉を守つて至誠奉公の國士となつて先生の御魂を慰め申し上げねばならぬのである。

### ◇弔辭及び弔電其の他

#### 弔辭

今次支那事變ノ勃發スルヤ君ハ榮譽アル帝國軍人トシテ暴支膺懲ノ壯途ニ就キ、東洋永遠ノ平和ト福祉増進トノ爲重責ヲ雙肩ニ擔ヒ奮戰力闘、光輝アル武勳ヲ建テ、遂ニ戰場ノ華ト散ラル。其ノ壯烈眞ニ譬フルニ物ナク悲痛極マリナント雖モ、忠魂永ク護國ノ神トナリ邦家百年ノ礎石トシテ仰ガル。男兒ノ本懐何モノカ之ニ加ヘシ。君以テ瞑スベキナリ。今ヤ皇國ノ威武ハ支那四百餘州ヲ壓シ、長期應戰以テ皇軍本來ノ使命ヲ達成スルニ邁往シツツアルノ秋、茲ニ赫々タル君ガ殉國ノ武功ヲ稱ヘテ、英靈長ヘニ邦家隆運ノ前途ヲ加護セラレンコトヲ禱リ、謹ミテ敬弔ノ微忱ヲ表ス。

昭和十三年十二月廿七日

文部大臣 男爵 荒木 貞夫

#### 弔辭

謹ミテ故滋賀縣立彦根中學校教諭陸軍砲兵大尉千原輝一氏ノ英靈ニ告グ。

君昨夏大命ヲ奉ジテ興亞ノ聖戰ニ參シ破邪顯正ノ劍ヲ提ゲテ征途ニ上リテヨリ一年有餘、其間北支中支ノ山野ニ轉戰、萬難ヲ克服シ具サニ辛酸ヲ嘗メテ百戰百勝赫々タル武勳ヲ建ツ。武漢攻略ノ戰線ニ向フヤ猛進激闘、十月六日ニ至リ大別山脈沙窩ニ奮戰中遂ニ壯烈無比ノ戰死ヲ遂ゲラル。嗚呼悲シイ哉。悲痛極リナク哀悼盡クルナント雖モ今ヤ皇軍ノ威武已ニ支那

中原ヲ制シ、稜威ハ遠ク蒙疆ニ北支中支南支ニ輝キ興亞ノ基礎日ニ固キヲ加フ。君又以テ瞑スルニ足ラン。

願ミルニ君本校ニ職ヲ奉ジテ茲ニ七年、君ガ崇高偉大ナル學徳ト温雅ニシテ而モ毅然タル風格トハ子弟同僚ノ夙ニ敬慕スル所、醇々懇切教ヘテ倦マザル熱誠ハ克ク子弟尊信ノ的トナリ、薰染徳化ノ大ナルコト定ニ稀ニ見ル所ニシテ君ニ接スル者齊シク其ノ人格ヲ欽仰セザルナク、何レモ君ガ凱旋ノ英姿ヲ迎ヘンコトヲ期シタリシニ今ヤ君既ニ亡シ。嗚呼悼マシイ哉。

慈父ノ如ク敬慕尊信セル幾多ノ子弟ト同僚諸士并ニ遺族ノ上ヲ慰ビテハ哀傷惻々轉々斷腸ノ感ニ禁ヘザルナリ。然レドモ君内ニ在リテハ克ク師表タルノ範ヲ垂レ出デテハ千載不滅ノ武勳ヲ建テ身ヲ以テ至誠奉公ノ儀範ヲ示シ、英靈永ヘニ皇國鎮護ノ神トナリテ皇基ヲ護ル、一死ノ榮何物カ之ニ如カンヤ。

茲ニ告別ノ典儀ニ列シ恭シク壇ヲ仰ギ伏シテ遺烈ヲ俾ビ、謹ミテ哀悼ノ誠ヲ捧ゲ以テ敬弔ノ意ヲ表ス。

昭和十三年十二月二十七日

滋賀縣知事 平 敏 孝

#### 弔詞

京都小林部隊長小林漸謹ミテ故本校教諭陸軍砲兵大尉千原輝一君ノ靈ニ告グ。

君ハ曩ニ大命ヲ拜シ〇〇部隊〇〇隊ノ連絡掛トシテ出征シ北支或ヒハ中支ニ轉戰シテ具サニ辛酸ヲ嘗メンガ、本年九月頃ヨリ皇軍ノ漢口攻略戰開始セラル、ヤ十月六日大別山沙窩西南方〇〇ノ攻撃ニ參加シ、敵彈ヲ犯シテ單身第一線歩兵大隊長水谷少佐ノ許ニ到リテ歩砲ノ連絡ニ從事中、敵迫撃砲ノ破片創ヲ蒙リ大腿部及右手ニ受傷シ軍醫ノ應急手當モ其ノ甲斐ナク出血多ク遂ニ瞑目セラル、噫々壯烈ナル哉。同所ニ於テハ前ニ水谷大隊長戰死シ後ニ千原君ノ部下タル森井軍曹及中塚上等兵相次イデ戰死ス。激戰ノ狀況思ヒ知ルベシ。

山行かば草むす屍 かへり見はせじ

トハ既ニ出征當時ニ於ケル軍人ノ覺悟ニシテ、實ニ君ノ如キハ其ノ死所ヲ選ビ範ヲ示シタルモノト云フベシ。殊ニ君ノ忠死以後其ノ地ハ完全ニ吾ガ軍ノ手中ニ歸シ、日章旗ハ〇山頂上ニ樹テラレ〇山ハ水谷山ト改稱セラレ漢口ハ皇軍ノ占領スル所トナリ、聖戰ノ目的ハ達セラレ東洋ノ平和確立セラレントス。君以テ瞑スベキナリ。在天ノ英靈尙ハクハ來リ饗ケヨ。

昭和十三年十二月二十七日

弔詞

謹ミテ故千原輝一君ノ靈ニ獻グ。

君ハ京都府何鹿郡ニ生レ京都府福知山中學校姫路高等學校ヲ經テ京都帝國大學文學部ニ學ビ、專ラ國文ノ學ヲ修メ深ク志ヲ我ガ國ノ文化ト精神トノ探究ニ寄ス。昭和五年三月ソノ業ヲ卒フルヤ選バレテ姫路高等學校講師タリシガ、幾許モナクシテ幹部候補生トシテ入營、退營ノ後ハ滋賀縣立彦根中學校教諭ニ任ゼラレ以テ今日ニ至レリ。今次支那事變ノ起ルヤ勇躍陸軍砲兵少尉トシテ應召南京ノ攻略戰ニカ、ヤカシキ武勳ヲタテ、サラニ漢口ノ攻略ニ參加センガソノ陷落ヲ前ニシテ十月六日大別山脈沙窩ノ激戰ニ壯烈ナル戰死ヲ遂グ。コノ間サキニ官陸軍砲兵中尉ニ進ミサラニ陸軍砲兵大尉ニ任ゼラレタリ。君資性温厚而モ凛然ノ氣象ヲ藏シ純情ニシテ内ニ熱情ヲタ、フ。人ノ師トシテハ教ヘテ倦ム所ヲ知ラズ。彦根中學校ニ於ケル六年必ズシモ長シトイフベカラザラムモ、ステニヨク生徒ノ信望ヲアツメソノ君ヲ慕フコト慈父ノ如クナルヲキ、將來ノ期待頗ル大ナルモノアリシモ、召ニ接スルヤ敢然劍ヲ執ツテ立テ遂ニ一死國ニ報ズルニ至ル。ア、尊キカナ。ソノ死。即チコレ大君ノ御楯トナリ東亞永遠ノ平和ノ礎トナルモノ。誰カ仰イデ感奮セザルベキ。今ヤ君ノ警咳ハ再ビコノ校庭ニ聞クコトヲ得ザルモ、英靈永ヘニコノ生徒ノ上ニトドマリ更ニ尊キ無言ノ教説ヲ垂ルトイフベキナリ。コ、ニ昭和十三年十二月二十七日君ガ告別ノ式ニ際シ聊カ所懐ヲ述ベテ君ガ靈ヲ弔ハントスルモノハ

京都帝國大學文學部長

西田直二郎

弔辭

故滋賀縣立彦根中學校教諭陸軍砲兵大尉千原輝一先生曩ニ大命ヲ拜シ皇師ニ從ツテ出動中支各地ニ轉戰赫々タル武勳ヲ建テラレシガ、漢口攻略戰ニ參加シテ奮戰中不幸敵砲彈ニ中ツテ名譽ノ戰死ヲ遂ゲラル。

先生資性温厚優雅人格高潔内ニ烈々タル奉公ノ至誠ヲ藏シ、教職ニ在リテハ深厚ナル薰化力ヲ以テ師道ノ典範トナリ子弟其ノ德ニ懷キ、征戰ニ臨ンデハ果敢沈着以テ武人ノ本領ヲ發揮シ部下ノ信賴極メテ厚シ。今ヤ事變ハ建設ノ階段ニ入り人徳才幹ヲ要スルコト愈々急ナルノ時ニ當ツテ先生ノ殉國ニ會フ。哀悼痛惜云フ所ヲ知ラズ。然リト雖モ英魂ハ靖國ノ神ト祭ラレテ、永ク國家ヲ鎮護シ子弟生徒相勵マシテ高志ヲ繼ガン。先生以テ瞑スベキナリ。茲ニ衷心ノ誠ヲ致シテ敬弔ノ意ヲ表ス。尙クハ來リ饗ケラレンコトヲ。

昭和十三年十二月二十七日

彦根高等商業學校長

矢野貫城

弔詞

故本校卒業生千原輝一君曩ニ勇躍征途ニツキ爾來本校出身者タルノ名ニ恥ヂズ、克ク軍律ヲ守リ各地ニ轉戰力闘シ武勳赫々タリ。今回中支戰線ニ於テ奮戰中名譽ノ戰死ヲ遂ゲラル悲報ニ接シ、洵ニ悼惜ノ念禁ズル能ハズ。茲ニ本校ヲ代表シ謹ミテ弔意ヲ表ス。

昭和十三年十二月廿七日

姫路高等學校長

木村善太郎

弔辭

謹ミテ故本會々員滋賀縣立彦根中學校教諭陸軍砲兵大尉千原輝一君ノ英靈ニ告グ。君資性温厚人ヲ容ルルノ量寛ク事ニ當リテ熱烈克ク其ノ任ヲ盡ス。曩ニ職ヲ當校ニ奉ズルヤ諄々トシテ教ヘテ倦ムトコロヲ知ラズ、生徒ハ慈父ノ如ク敬慕シ同僚ノ信賴亦頗ル厚シ。君ガ專攻タル文學ニ於テ特ニ近松ノ研究ニ造詣深ク、又當校野球部長タルヤ熱誠ニシテ懇切ナル指導ト其ノ責任感ノ強カリシコトハ言語ニ絶スルモノアリ。

今次事變ノ勃發スルニ及ビ軍ニ召サレテ勇躍征途ニ上リ、峻峻ヲ攀チ泥濘ヲ蹈ミ不眠不休以テ暴戾ナル敵軍ノ擊碎ニ努メ鬼神ヲ泣カシムルノ慨アリシモ、昭和十三年十月六日漢口攻落ニ先ダチ赫々タル武勳ヲ遺シ壯烈ナル名譽ノ戰死ヲ遂ゲラル嗚呼悲シイ哉。

然リト雖モ君ノ忠誠義烈ハ以テ皇威ヲ中外ニ宣揚シ天晴日本男子ノ本分ヲ發揮シタルモノトイフベク、英名ハ永ヘニ竹帛ニ垂レ後世ノ龜鑑タリ。以テ瞑スベキナリ。不肖本日ノ祭典ニ列スルヲ得聊カ蕪辭ヲ述ベテ君ガ英靈ヲ弔ヒ其ノ冥福ヲ祈ル

希クハ彷彿トシテ來リ響ケヨ。

昭和十三年十二月廿七日

滋賀縣教育會長

平

敏

孝

弔 辭

僭越ナガラモ同窓會並ビニ野球部先輩一同ニ代リマシテ恩師千原輝一先生ノ御靈ニ捧ゲマス。

唯今先生ト永キ御別レヲシヨウトシテ居マスニ當リ、唯萬感ノ胸ニ迫ル許リデ申上グベキ適當ナ御別レノ言葉モ見出シ得マセン。東亞ノ風雲愈々急フ告ゲ日支事變ノ勃發スルヤ、先生ニハ戰塵渦卷ク北支ニ御參戰、續イテ揚子江北岸白卯江ノ敵前上陸ヨリ馬ヲ敵首都南京大攻略戰ニ前メラレ長驅徐州大殲滅戰ニ御參加セラレ、今秋漢口大攻略ノ火蓋ノ切ラレ私達ハ先生ノ御活躍ヲ期シテ待ツテキタノデアリマシタ。而シテ私達ハ先生ノ赫々タル御武勳ヲ今カ今カト待ツテキマシタノニ、嗚呼然ルニ私達ノ受ケマシタノハ先生ノ御便リナラズシテ、沙窩ニ於ケル壯烈極リナキ名譽ノ御戰死ノ報デシタ。

思ヘバ先生ニハ非常ニ御世話ニナリマシタ。先生ニハ七星霜ノ長キニ亘リ、博學達識ヲ以テ、而カモ何ラ誇ラレル所モナク、優シク生徒ヲ指導シテ下サイマシタ。一方野球部理事トシテノ先生ノ御功績ハ今更申シ上ゲルマデモアリマセン。近年野球部ガ黃金時代ヲ見マシタ事モ全ク先生ノ御努力ノ賜デス。私モ野球部ノ一員トシマシテ先生カラ慈父ニモ勝ツテ御面倒ヲ見テ戴キマシタ。先生ハ温容ナル中ニモ強イ責任感ヲ持ツテ居ラレマシタ。例ヘバ合宿練習ニ際シテモ先生ハ合宿所ノアノ暑苦シキ小サナ部屋ニ起居サレテ、選手ノ日常生活ニマデ注意シテ下サイマシタ。又私達ガ授業ヲ終ツテグラウンドヘ出テ見マスト、先生ハ只一人黙々トシテ石拾ヒヲシテ居ラレタ事モアリマシタ。又チームワークノ爲メ私達ハヨク集マリマシテ先生ヲ御中心ニ時ノ經ツノモ忘レマシタ。斯クテ仰望オカザル先生ヲ千載百世マデモト祈リマシタノニ、有爲轉變ハ世ノ習トハ云ヘ何タルコトデセウ。嘗テノ先生ノ教ヘ子達ハ此處ニ集ツテ居リマスノニ、先生ハ遂ニ永劫ニ不歸ノ客トナラレマシタ。今ヤ幽明境ヲ異ニシ今一度先生ノ御聲ヲ待テドモ語り給ハズ、御姿ヲト見レドモ見得ラレマセン。腸九廻ノ思ヒガ致シマス。

嗚呼人生無常永遠ハ望ムベクモアリマセン。然シ苟クモ生ケルカラニハ吾ガ生ヲ有意義ニ過シタイモノデス。短キ人生ヲ徒ラニ醉生夢死致シマスコトハ堪ヘ難イ苦痛デアリマス。先生ハ曾テ教ヘテ下サイマシタ。「大丈夫ハ玉碎ストモ軛全ヲ恥

ヅ。ト。而シテ先生ハ身ヲ以テソレヲ御示シ下サイマシタ。即チ内ニシテハ赤心子弟ノ教育ニアタラレ外ニシテハ一身ヲ捧ゲテ邦國ノ爲ニ盡サレマシタ。嗚呼先生ハ生キテハ敬慕オカザル私達ノ慈父デ在ラセラレ、死シテハ亦永遠ニ青史ヲ飾ラレタル先生デアラセラレマス。私達ハ嘗テ在リシ日ニ教ヘテ戴キマシタ先生ノ御心ヲ心トシテ、今後一層奮闘努力シテ先生ノ御高志ニ御報イ致ス決心デ御座イマス。デハ先生、御在天ノ英靈ヨ、彷彿トシテ私達ノ誠ヲ來リ享ケセラレンコトヲ。

昭和十三年十二月廿七日

元野球部總代

上

杉

襄

司

弔 辭

先生ニハ曩ニ支那事變勃發致シマスルヤ最モ名譽アル 大元帥陛下ノ砲兵少尉トシテ勇躍御應召ナサレ、私達モ金龜驛頭ニ御壯途ヲ御送りシタノデアリマシタ。

回顧シマスレバアノ時私達ニ賜ツタ言々句々燃エルガ如キ烈々ノ氣魄ノ籠ツタ御教訓ハ切々トシテ胸ニ迫ルモノアリ、今尙肝ニ銘ジテ忘レラレナイノデアリマス。而ルニ噫、ソレガ最後ノ永遠ノ御教訓ニナラウトハ神ナラヌ身ノ誰ガ思ツタコトデアリマセウ。私達ハ汽車ガ消エテシマツテモ尙漂フ煙ニ武運長久ヲ祈ツタノデアリマシタ。斯クテ迎ヘ送ツタ聖戰一年ノ間先生ニハ北支ノ山野ヲ馬蹄ニ蹂躪サレ、或ハ轉ジテ揚子江岸○○ノ敵前上陸カラ一氣ニ馬ヲ首都南京攻略ニ前メラレ、或ハ徐州大會戰カラ○○ノ追撃ニ偉功ヲ樹テラレルナド掃風沐雨ノ間、戰止ミシソノ隙ニ異境遙ニ賜ツタ御手紙ヤ軍裝漂々シイ御寫眞ニ先生御健闘ノ御英姿ヲ偲ンデハ限リナイ御武運ノ程ヲ祈リ、ヤガテハ再ビ御指導下サイマス日ヲバ教室ニ校庭ニ語リツツ待ツテキタノデアリマシタ。然ルニ嗚呼何ゾヤ秋モ半ノ十月六日容共抗日ノ牙城武漢大攻略戰ニ參加サレタ先生ニハ、大別山ノ一脈タル沙窩ノ激戰ニテ無念ヤ敵迫撃砲彈ヲ大腿部ニ受ケサセラレ、誠ニ壯烈鬼神モ泣ク御戰死ヲ遂ゲサセラレタノデアリマス。嗚呼天ナル哉。命ナル哉。先生ガ淨魂ハ榮光ニ輝ク武漢陷落ヲ待タズシテ大別山系オク露ヨリモ儘ク散ラル、ソノ悲報ヲ受ケタ私達ノ血汐ハ凍リ腸ハチギレル念ヒニ一同唯聲ヲノムノミデアリマシタ。願ヘバ過グル年和カナ日射シヲ浴ビテ教壇ニ立タセラレテキタ先生ノ御温顔ハ彷彿トシテ今モ尙去來シ、アノ優シイ御聲ハ今モ尙室ノ一隅カラ響イテクル心地ガシテナリマセン。ダガ今ハ幽明境ヲ異ニシテ呼ベド答ヘ給ハヌ先生トナラレタコトヲ思フ時、涙更ニ新ナ

ルヲ覺エルノデアリマス。然シ先生、先生ノ御指導ヲ添ジケナクシタ私達生徒ハ徒ニ女々シク泪ノミヲ以テ御仕ヘハ致シマ  
 セン。先生ノ御示シ下サツタ盡忠報國ノ御精神ヲ精神トシテ至誠奉公ノ國士トナリ、以テ銃後ノ安泰ト長期建設ノ國是ニ副  
 ヒ奉ル決心デアリマス。先生在天ノ英靈ヨ、冀クバ來リテ在リシ日ノ講堂ニ在リシ日ノ生徒ノ心カラナル哀悼ノ誠ヲ享ケサ  
 セラレンコトヲ。

昭和十三年十二月廿七日

滋賀縣立彦根中學校生徒總代

豆 子 清 一

弔 電

謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。  
 謹ミテ千原輝一氏ノ校葬ヲ營マルルニ當リ哀悼ノ意ヲ表ス。  
 故陸軍砲兵大尉千原輝一君ガ殉國ノ英靈ニ對シ恭シク弔意ヲ披瀝ス。  
 千原氏ノ英靈ニ對シ謹ミテ弔意ヲ表ス。  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。  
 衆議院議員 衆議院議員  
 衆議院議員 衆議院議員  
 滋賀縣總務部長 滋賀縣總務部長  
 滋賀縣總務部庶務課長 滋賀縣總務部庶務課長  
 滋賀縣會議長 滋賀縣會議長  
 滋賀縣會議員 滋賀縣會議員  
 滋賀縣會議員 滋賀縣會議員  
 滋賀縣會議員 滋賀縣會議員  
 滋賀縣會議員 滋賀縣會議員  
 滋賀縣會議員 滋賀縣會議員  
 中岡第十六師團長閣下 中岡第十六師團長閣下  
 安藤第九師團長閣下 安藤第九師團長閣下  
 京都帝國大學總長羽田亨閣下 京都帝國大學總長羽田亨閣下  
 姫路高等學校長閣下 姫路高等學校長閣下  
 堤康次郎殿 堤康次郎殿  
 青木亮貴殿 青木亮貴殿  
 內藤三郎殿 內藤三郎殿  
 前川鬼子男殿 前川鬼子男殿  
 田中久平殿 田中久平殿  
 大橋新次郎殿 大橋新次郎殿  
 別所喜一郎殿 別所喜一郎殿  
 望月長司殿 望月長司殿  
 野一色宰治殿 野一色宰治殿  
 植村善三郎殿 植村善三郎殿

千原大尉ノ勳ヲ俾ビ謹ミテソノイツノ御タマヲオロガシマツル。京都帝國文學會會長 澤 瀧 久 孝 殿  
 謹ミテ千原輝一氏ノ英靈ニ弔意ヲ表ス。 福知山中學校長 松 田 清 四 郎 殿  
 謹ミテ千原大尉ノ英靈ヲ弔ス。 滋賀縣師範學校長 正 田 隆 殿  
 護國ノ英靈ニ對シ謹ミテ敬弔ノ意ヲ表ス。 滋賀縣女子師範學校長 小 林 和 一 殿  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。 滋賀縣立膳所中學校長 杉 本 一 郎 殿  
 護國ノ英靈ニ對シ謹ミテ敬弔ノ意ヲ表ス。 滋賀縣立大津高等女學校長 三 輪 菊 三 郎 殿  
 謹ミテ哀悼ノ意ヲ表ス。 滋賀縣立栗太農學校長 塚 本 繁 吉 殿  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。 滋賀縣立伊香農學校長 國 枝 省 三 殿  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。 滋賀縣立神崎商業學校長 鷓 飼 喜 平 殿  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。 滋賀縣立彦根商業學校長 大 西 太 二 殿  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。 大津市立高等女學校長 稻 葉 小 三 郎 殿  
 護國ノ英靈ニ對シ謹ミテ敬弔ノ意ヲ表ス。 草津高等女學校長 高 田 寬 隆 殿  
 護國ノ英靈ニ對シ謹ミテ敬弔ノ意ヲ表ス。 藤樹實科高等女學校長 松 本 義 懿 殿  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。 名古屋市 名 古 屋 新 聞 社 長 殿  
 故千原大尉ノ英靈ニ對シ謹ミテ敬弔ノ意ヲ表ス。 前配屬將校 川 崎 少 佐 殿  
 千原先生ノ御勳功ヲ稱ヘ謹ミテ弔意ヲ表ス。 同窓會京都支部 小 島 米 吉 殿  
 護國ノ英靈ニ對シ謹ミテ敬弔ノ意ヲ表ス。 護國ノ花故千原大尉殿ノ校葬ニ際シ謹ミテ哀悼ノ意ヲ表ス。 奈良縣天理第二中學校 笠 井 久 殿  
 謹ミテ護國ノ英靈ニ對シ敬弔ノ意ヲ表ス。 同窓會員 川 村 中 尉 殿  
 千原先生ヲ弔ス。 同 安 澤 哲 男 殿  
 謹ンデ哀悼ノ意ヲ表ス。 同 安 澤 宣 男 殿  
 謹ンデ哀悼ノ意ヲ表ス。 同 上 布 施 一 男 殿

附記——校葬ニ際シ贈ラレタル花環

- 陸軍大臣閣下一個
- 侯爵徳川義親閣下一對
- 京都市尙武會一個
- 彦根市長一個
- 滋賀縣下中等學校長一同一對
- 在彦中等學校(工業、商業、女學校)一同一個
- 本校職員一同一對
- 本校生徒一同一對

——以下略ス

◆千原輝一先生略歴

出生 明治二十八年七月二十五日生。原籍 京都府何鹿郡物部村宇白道路。大正十三年三月 京都府立福知山中學校卒業。  
 昭和二年三月十日 姫路高等學校文科卒業。昭和五年三月三十一日 京都帝國大學文學部文學科卒業。昭和五年四月一日 姫路高等學校講師ヲ囑託セラル。昭和六年一月三十一日 姫路高等學校講師ノ囑託ヲ解ク。昭和六年二月一日 幹部候補生トシテ野砲兵第二十二聯隊ニ入營。昭和六年十一月三十日 期間滿了ニツキ野砲兵第二十二聯隊ヲ退營。昭和七年三月三十一日 滋賀縣立彦根中學校教員ヲ囑託セラル。昭和七年八月三十一日 滋賀縣立彦根中學校教諭ニ任ゼラル。昭和八年三月三十一日 任陸軍砲兵少尉。昭和八年四月一日 叙正八位。昭和十二年〇月〇日〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇ニ應召入隊。昭和十三年九月三十日 任陸軍砲兵中尉。昭和十三年十月六日 北支河南省商城縣沙窩東樓高地附近ノ戰闘ニ於テ戰死。同年同日 任陸軍砲兵大尉。

◆遺稿

千原先生は生前、戦地の匆忙にあつて丹念に日記して感想を遺されてゐます、これは戦死直前の日記で最近令夫人から届けられました分です、思へばこれが先生の絶筆となつたのです、日々の御辛苦、戦死當日の状況はこの文から十分に推察されます。承れば、遺品の上衣のポケットに小さい栗が残つてゐたさうです、この文によりそれは死の前日に採取されたものこがわがわかります、一層悲しくなるではありませんか、どうぞ先生の聲に親しく接してゐる心で味讀して下さい。

十月一日

朝來霧の如き雨、二時命令を受領し四時部隊に歸る一寸寝て六時に起き暗の中を〇〇〇〇地方高地を探して前進道を誤り高き山二つを越えて漸く目指す觀測所の山に着く、第一線連絡を覺悟せしに北田君赴きたり、△やがて到着し今日は非常に近し霧雨涼しくて攻撃困難なり、第一線は一つの山を占領せしまゝ停止、命を待つといふ、遠くの山に退却の敵あり射ち始めると霧かゝりて見えなくなる、残念なり師團は攻撃の策を練るといひ夕刻迄そのまゝ山の上にとどまる敵の撤きし反戦、パンフレットを拾ふ、通行証といふ投降票の如きものもあり、友軍機の撤きしビラもあり六時山を下り、夕食をすませて△に赴く。藤田副官の高热にて昨日のまゝ連絡室に臥し居り氣の毒なり。十一時命令を受領して歸る昨夜の家なり。福島准尉の話によれば畑野大尉は砲の全弾を浴びて僅に軍刀の刀身を殘せるのみなりきと、壯烈悲絶の最後なるかな。

十月二日 晴

攻撃準備の爲三日の余裕ありと大隊長觀測班長はあちこち多忙なれど我は一日休養す。よく眠りたり。配給のバイ罐、鯛の煮干しをまし。敵の砲彈〇〇北方三叉路附近に頻りに落下す、損害はなけれど生意氣なり、肌着を着かへて氣持よし。

十月三日 霧深し快晴らし

師團の攻撃部署定る、五日拂曉も霧霽れず、丹波の秋を思ふ。三時過大隊長より即時用意を整へて山に登れとの傳騎來る、四時過出發〇〇の北敵砲彈の毎日よく落ちしあたりを過ぎ川を渡り山にかゝる、その頃又敵砲兵射ち始む、正午過の砲撃は後方の大行李附近を襲ひ△本部にて特務兵各一名戰死せりと今見る彈は〇〇城内外に落ちてゐる、途中までは馬、〇〇の山に、かゝりて徒歩す日落ちて月出づ、ゆるりゆるり夕飯も途中でたべて登る、八時漸く山頂近く觀測所に達す、比叡山位の高さは充分あるべし。月光を浴びて脚下に開くる山々谷々白く光る川げに雄大なる眺めなり、歩兵の下士哨が作りくれしといふ壕に天幕を張りて眠る背中和腰冷し。一枚の毛布を柏餅にして寢氣を防ぐ、疲れてよく眠る。

十月四日 晴

七時眼覺む天明に見る景觀月光と又異りたる壯觀なり伊吹山より中部地方の山々を望みたるよりもなほ多くの山々峯々連りて一の平地もなし頂山に鉢巻の如く圍壁をめぐらしたる山方々にあり一二軒づゝの家もあちこちの谷間に見ゆ。遠くも來つるかな今朝は霧なし、昨夜はよく眠りて知らざりしが今朝二時こちらの歩哨が一人二發宛の威嚇射撃をやつたら敵は一時半

にわたつて射ち返し手榴弾を投げてきたさうなり。毎晩聞えしボン／＼パチ／＼はこれなりしなり、夜襲にひどく神経過敏になつてゐたらし。△につかまりし捕虜の曹長の話では弾はいくらでもある、飯は三日食はぬといつた由書間は寝てゐて夜はラツバで飛起きて射ち出すらし。

二三日か四五日はこゝで山籠りなれば少し立派な別荘を作るべく朝來兵隊さんと土工作業。斜面を一米半ほど掘下げその土を三方に積み排水溝を作り上に天幕を張る土工作業午後三時に至り完成す。所々堅くしてキラ／＼光る土質あり金脈ならずとや、皆々一度は手に取つてみる。よく晴れてこれほど高い山でも随分暑し。芝草にまじりて柴栗あり。せい／＼一尺五寸位の高さの枝に豆粒大の實をつけたり、はぢけたいがから實を取りて食ふ。かなりの味あり。夕刻幕舎を移す。「輕井澤の別荘です、これだけの庭をもつた別荘は一寸ありますまい。」と威張つて寝る。昨夜は天幕の隙より月見をせしが今日はうまく張りて夜風を防ぐ、當番は昨日馬を下りし所より二食宛の辨當を運ぶなり、「日本軍指定ハイキングコース」仲々に辛苦々々なり。

十月五日

總攻撃は一日延期さる。準備に萬全を期するなるべし。今朝も七時起床霧なし、晴。谷に下りて顔を洗ふ。栗を探る△長△長夫々汗ビツシヨリになつて登つてこらる。全くこんな恐しい山の高い所で陣地戦をやるとは思はざりし。タバコだけはまだ相當余裕あり。山のバナナマを見ながら煙を吐いて右下の〇〇に砲弾が炸裂しても頭の上にヒューンと小銃弾が飛んでも一向に平氣なり。敵には十五榴級二門野砲級二門あるらし。野砲級のは不發彈多し。射ち出すと皆面白がつて敵砲兵の射弾觀測をしてやつてゐる。

昨日裸で土工作業をしたので今日背中の皮がビリ／＼痛む手足の節々も痛む。

◇追悼錄

噫 千原先生

客員 平井乙磨

土に朽つわれらおもへばさびしきも君は歴史の墓にねむらす  
噫 君は 漢口へ漢口へ 雪崩の如く 怒濤の如く進撃するみ戦に参加して、大別山も主嶺を越えた敵の既設陣地、〇〇へ向ふ線上の沙窩の攻撃戦に  
み戦の一瞬を血にいろどりて午後一時五分沙窩に死なせり  
遂に君はゆきませり——露繁き十月六日。  
今宵過去の記憶の系列に繋る君を偲びつつ痛しくも永遠の譜を綴らねばならぬか——  
君と相識るを得たのは昭和七年四月、職を本校に奉ぜられた其の日からであつた。その日君の與へた印象は現象されたアラビヤ娘の澄潤さだつた  
どこか茶目つ氣があり、大やうさがあり  
鋭いものへ巧に迷彩を施してゐた君だつた。  
その日から君と僕とは、溺れるやうに友情のなかへ沈んで行つた。いま追憶のアルバムをめくつて見ると、宇曾川のどちらかと言へば散りかかつた櫻並木の下で、愛兒延一君を高々と胸に抱いて笑つてゐる。ある日曜は醒井の鱒に興じ、ある日は内湖の葦の風に耳を磨いたアルバムもある。松原を歩み磯を訪ね雲を眺め小鳥を聞き、時には眩しい燈火のもとに君が蘊蓄の深きに耳を傾けた。一夏叡山に起居を同じくして萬葉講座に過したなど限らない追憶の葩にあへかに胸の痛みを覺える。  
君は高潔な人格者だつた  
充ちて而も鳴らず  
何もかも知悉して



而も何もかも知らない君だつた。

私は君を愛し君を敬した。私は君を知り君も私を知つてくれた。さうして花を賞し風を聴き楽しい四季であつた。かうした君と僕との交りは、どの頁を切つても生々しい詞藻に満ち満ちてゐる。

十二年八月二十五日 その頃私は北陸の寒魚村にゐて、日に日に險惡に夥る空を眺めて砲兵少尉の君が身の上に思ひを馳せてゐた。

蘆溝橋一發の銃聲は 来る日も来る日も不安を増すばかりだつた。九月になつたら——と思つてゐた矢先、電報だ。私はその日旅の生活を蒼黄と切あげて歸つて來た。

君と合つた。何も言はなかつた。唯それだけだつたが——。

二十六日 君の軍装は凛々しい限りだつた。萬歳と萬歳と、旗と旗の波のなかで、教へ子が人々が、幾度か战友の歌を和した。停車場の廣場で烈たる氣魄の籠つた君の挨拶が、未だ耳底に残つたまま、永久に消えない今日とはなつた。

ああ あの日 旗と旗の波を泳いで旗を振つた。しびれる程の感激をこめて旗を振つた。君の武運長久を祈つて喉も裂けよとばかり叫んだ。

同日野砲二十二聯隊の衛門に送つて君と別れたのが、生別のやがて死別のそれであつた。

八月君は北支に上陸 京漢、津浦線の間濕地帯進撃、○○○に行き○○○に轉戦、かくして君が再び○○○に歸つたのは十二年の夏過ぎで、今度また船に乗るらしいが十月上旬頃の新聞を見てゐて呉れとの知らせだつた。何だか氣がかりで、毎日青い木の實を噛むやうなせつなさで新聞を握つた。

灯にさえてあかき林檎をおきかへぬいと戀ふる夜のなぐさみごとか

夜をふけて紅く灯を吸ふ林檎あり林檎となりてぼつねんとゐる

夜をふけて戀ひつつあれば林檎さへ少尉がまみて思ほゆるかも

地圖のへに進む少尉の足あとの見ゆる夜かもラデオニユースに

かうした思ひに沈んでゐる時、戦況は俄然大發展を見せて、南京へ南京へと潮の如く進撃するニユース、これだ之だ、君の觀測の正確さにトーチカも城壁も木葉微塵に破砕されてゐるだらうと遙に武運長久を念じてゐた。

果して楊子江岸○○○上陸夜も晝も巨彈をぶつ放したと勇ましい便りだつた。

敵首都は今ぞ落ちたかしようことない歡びのなかの友の安否よ

あけくれの思ひもほつとくづれたり首都をいづる日のみ旗かな

かゝる思ひの明暮のうちに、故郷に於ては雪が消え苗が育ち、麥の波が黄色く靡き出した頃、皇軍はまた懸河の勢で徐州大殲滅戦を展開した。八月中旬の君の便りは、鞭をあげて中支を蹂躪し、○○○線に沿うて大追撃戦に轉じたが、遂に黄河の濁水を呑むとあつた。そして三度乗船新しき征途へ登ると——。

君の青島からの便りは之からふつりと切れた。

十月十四日 一葉の電報は君の戦死を報じた。職員一同只管嘘であれかしと念じつつ黙禱した。心の底で否定に否定を重ねつつも涙が溢れて仕方がなかつた。夕方私の所へも電報が來た。ガンと頭を殴られた思ひがした。翌日は寫眞まで掲げて新聞に出た。その翌日は墓標の新聞寫眞まで出た。嘘であれと只管に念じたが今は信ぜねばならぬか。

わが胸をむしりさいなむ電報に遠く中支の砲音ふるふ

日を経つつ戦死の料のかさなれば骨にひびきて秋なりにけり

晩秋の憂鬱な日々よ。緋のグリアが思ひなしか裏の畑にふるへてゐる。

君が死に聲をのみつつ庭にいでて赤きグリアの花びらをもむ

眼球は泪にうきて緋のグリアゆれつつにじむせつなさにゐる

私は急に戦争を身近く感じた。雑誌に書物に戦争は讀み取つたけれど切實には來なかつたのに

君が死はいくさの距離をいまさらのごとく身近に持ちて來ませり

呼べばとて叫べばとて君が姿は現身のそれではない。雄魂遠く神去りましし君を私は夜な夜な地圖をたどりつつ墓道を捜した。そして沙窩の丘べに探りあてて嘆くのみがせめてもの慰みだつた。

支那地圖の大別山にたどりつき沙窩の墓を今宵もさがす

夜ふけて君が弔辭に疲れたり大別山を指に越えつつ

君が戦死の詳報を讀めば鬼神も避くる壯烈な戦死だ。さうだ。やつぱり君にして出来る戦死だ。君はどんなに激しい砲彈

の炸裂に會はうとも、銃が機銃が吼へようとも決して身を伏せなかつたと聯隊の人の話だつた。そして遂に迫撃砲の一弾は君を故郷遠き歴史のなかへ埋めてしまつた。

十二月二十六日 君の變つた姿を京都師團に迎へ續いて彦根に迎へた。ありし日の君を偲び今日を思つて轉々反側の一夜を明かした。

人の世のすがた思へばねむられず曉のガラスの寒さひびくも

廿七日 學校の告別式を終へて君を丹波に御送りした。

三十日 村葬。嘗て君が通はれた村の道霜柱の立つた路を歩みつつ、私の幻想は涯なく續いた。路を挟んだ桑畑に、路の邊の小丘に、溝川に、用水池に、何處かに君の思出がころがり、何處かに君が少年の日の姿でばつと飛び出して來る思ひで一ぱいだつた。だが然し、小鳥鳴く村の道には、故砲兵大尉の銘旗がさむざむと風に搖ぎ、山の麓を廻つて黒く長く供の人の行列が續いてゐた。

村の學校にみ葬の式を終へて校庭に立つた時。

私の思ひは崩れたち一時に涙が溢れた。君の故郷にかうした思ひで來ようとは何時の日に思つたらう。話に聞いた丹波路へ、而も君のみ骨を守る日があらうとは、何時の日に考へてみたことか。

夜ふけて風もおちたり脳漿に浮びて來ます君をなげくも

今こそ君よ父母のみす故郷の墓に靜かに安らげく眠りませよ。

然し君よ嘆けばとて、君の尊い血潮は一滴たりとて無駄には致しませぬ。君が念願の漢口は既に陥落して新日本は待機の姿勢を整へて待つ

支那四百餘州の脈は夜を晝にちぢまりゆけり漢口もおつ

そして廣東も亦皇軍の攻略するところとなり、國威は南へ南へと伸びつつあるのだ。

赤道の南に沈め日の旗の理想のあかきユニオンの比にあらす君よ以て莞爾として瞑せられよ。

## 千原先生の戦死を悼む

五年 尾本庄三

土曜日の朝、秋の淋しきに加へて、小雨は音も靜かに城下の學園を濕して居た。

と階段の所で小使さんが友達と眞面目な顔で語り合ひそれ等の人々の顔は緊張と悲しみとで顔筋が固定してしまつた様にこわばつて居て私が彼等から聞いた言葉は、嗚呼、何と私の胸に強いショックをあたへ私は奈落の底につき落された感を全身に覺えた。

私は暫し茫然として無意識に階段を上り自分の教室の戸を開いた。そこには誰も居なかつた。朝の教室はがらんとして冷たくそして悲しく私を迎へた。私は席に腰をおろした。

千原先生が戦死された。噫！ 終に先生は大和おのこの血潮もて異境の草を露らしめ給ふたのだ。我等はもうあの温厚な先生を驛頭に拜する事は永遠に達せられない望みとなつてしまつた。唯寂しく先生の御英靈を待つのみ。ありし日の教壇の先生の面影、驛頭にお送り申した時のお喜びの御顔、師弟離別の涙、私はもう胸が迫り眞黒な布で頭を覆はれて怒濤に打たれて居る様に悲愴な感にうたれた。

教室に入つて來る靴音に、急に今までの怒濤がすうつとひいて夢から醒めた様に友の顔を見上げた。そこには濃い憂色に閉された顔があるばかり。交はず言葉もなく出て行つた。私はやつと週番の任務に目醒めて窓を開いた。そしてぼんやりと校門を見つめながら此の報が誤であつてほしい、いやさうであるべきだと御戦死を自分の心に否定して見たがその希望の光も一瞬の夢であつた。友人が朝刊に報ぜられて居たと話した。も早否定出來ぬ事實となつた。前に増した悲しみがどつとこみ上つて來た。然し先生は身を以つて校訓の實をお示し下さいました。私等は御心に副ふべく努力します。嗚呼！ 思へば驛頭に御歡送申上げてより一年有餘北支、南京、徐州に轉戦せられ終に漢口攻畧の半にして御戦死の報に接するとは…………… 英靈永遠に靖國の宮に鎮まりませ。我等八百五十の健兒は赤鬼魂を持つて居ります。必らずや先生の仇は討ちます。

秋雨にけぶる金龜の城を見上げて先生の御冥福を祈る瞳に心なしか校門の弔旗が雨風にゆれて泣いてゐた。

## あゝ千原先生

五年 大口善有

十月十五日の朝の空、

いつもと異つて嬾々とお城の鐘が鳴つた時。  
我等は悲しき報らせを聞きました。

—千原先生の御戦死—を。  
噫！何んたる此の悲報。我等はたゞ茫然として我が耳を疑ふばかり。

思へば昨年八月に彦根驛頭朝まだき、「最後に生徒諸君に一言申し上げます」と

あの先生の烈々たる御教訓、今尙脳裡に刻まる。

あゝ、その先生はあの汽車の、窓に消えたまゝ永久に……。極寒零下の北支の山地に、險難馳驅して頑敵の掃蕩。

或は南京、除州の天地に御奮戦

武勳を建てられ、大別山中奥深く

目指す漢口を睥睨し、花と散られた先生を思へば悲し今日の目。

噫、此の學舎で、此のグラウンドで、我等を導かれた先生。嗚呼！眼前に彷彿たり。微笑まれて——。

而し先生は既に此の世に居まさず——菊薫る秋酣——護國の鬼となられて

我々は先生の手柄話をつてゐ待ちましたのに。

いや、先生は本當に此の世を去られたのか——。

先生よ、我等は一心に勵みます。  
希くは先生の御靈よ、安らかにねむりませ。九段の地より久

とは思ふものの、運命は如何ともすることが出来なかつたのか。

嗚呼。先生は本校校訓の至誠奉公の國士たるの範を、身を以て我等八百の健兒に御示しになつたのであります。我等はつたないながらも先生の御高恩の萬一にも報い奉る様、先生の御靈に對して感謝の祈禱を捧げると同時に銃後の護りを固うし、更に第二國民として將來の覺悟を誓はなければなりません。

今や先生の形骸は地下に歸し給ひたれども、英魂は千秋に輝き極天の下永く皇國を守護して死し給はず、我等の行手を守つて下さることせう。

噫川千原先生。

## 噫千原先生

四年 協坂信隆

十月十四日、我等彦中八百五十の健兒は非常に悲しき報知を受けなくてはならなかつた。それは我等の恩師千原先生御戦死の悲報なのだ。

朝飯を終へ、無敵皇軍の偉大なる戦局は如何ばかり進展しただらうか、と新しい、嬉しい希望に燃えて新聞を開いた時ふと千原輝一中尉戦死の記事が目に着いた。私は此の記事を見た時愕然として驚き、一度ならず私の目を疑つた。

遠に我等彦中健兒を守りませ。

あゝ先生！千原先生……。

## 噫千原先生

四年 堀清

さうだ。千原先生が陸軍砲兵少尉として勇躍征途につかれた時、感激の驛頭に咽喉も裂けよと絶叫したのは、暑さの去らぬ去年八月の末だつた。其の後先生には北支に或は中支に山地の險難を馳驅し日夜悪戦苦闘遊ばされて居られました。我等彦中八百の健兒は常に先生の御武運長久を御祈り致して居りました。然るにその甲斐もなく先生は菊花薫る十月中旬漢口攻略への進撃中をしくも護國の花と散られたのであります。彦中八百の健兒は茲に謹みて先生の英靈永久に安かれと祈るものであります。

思へば、先生は我が彦中の教壇に立たれては、我等の慈父となり親友となつて御導き下さいました。そして戦地に行かれてからの度々の御便りの中にも、先生の御人格、國思ふ烈々の氣魄、潑刺たる意氣、生徒を思ふ優しい御眞情があふれて居りました。その御手紙を見るにつけ歡呼を浴びて御凱旋なさる日のみを待ち憧れてゐたのに、先生が名譽の戦死を遊ばされたといふ校長先生の御話を聞いた時、どうしてもそれを信ずる事が出来ませんでした。「人一倍元氣だつた先生が」

全く晴天の霹靂である。「千原先生が戦死、いやさうではあるまい。何かの間違だ。どうかさうであつて欲しい。」と祈りつゝ登校した。併し運命の神は遂に先生を見放したのか、悲壯な顔をして校長先生は壇上に立たれた。我等八百五十の健兒は、如何なる御言葉が發せられるだらうか、一語も聞き漏らさじと、息づまる一瞬、嗟乎其の御言葉は我等を奈落のどん底につき落したのである。燦然たる金鷄勳章を胸に輝かせて、凱旋なされる先生を待ち望んでゐた我等だつたのに。あの柔和な先生のお顔に最早お目にかゝる事は出来ないのだ。

思へば、去年の八月末熱烈溢るゝ萬歳の聲を以て彦根驛頭に御歡送申した時から、早や一年二ヶ月を閲し、其の間仄聞する所に依れば、先生は久しく、突兀たる北支の峻險に、或は膝を没する泥濘を縦横に馳驅して頑敵掃蕩に従事せられ、又中支南京攻畧等赫々たる武勳を樹てられ、我等は何よりの誇としてゐたのである。

嗟乎それなのに、先生は異境支那の地に大和武士の花吹雪と散られたのだ。東洋平和、否世界平和の礎石となられたのである。

廊下に掲げられた懐しい先生の御寫眞を拜する時、先生と共に學び得た時の樂しさ喜ばしさが髣髴として涌き上り、既に亡き御魂かと思へば感慨うたゝ無量、こみ上げて来る悲しさを止め得ないのである。然し、先生の御肉體は還らねど

その忠烈無比なる御功績は永遠に萬世の下青史に輝き、英靈は靖國の御社に神鎮まりますのである。我等は此の先生の身を以てお諭しになつた殉忠の御精神に副ひ奉る爲には、愈々眞の長期戦に對する物心両方面の護を嚴にし、少しでも先生の御靈をお慰めする様努力せねばならない。

希くは先生の御靈よ、曉雲を衝いて昇らんとする旭日の如き新興日本の前途をとこしへにお護り下さらんことを。

### 千原先生を憶ふ

三年 小南 欣一

校門の國旗が黒い布に包まれてゐる。今日はどう云ふ日だらうかと僕は不思議に思ひながら、何んだか落着かぬ心持で教室に入り、準備が終つてから運動場へ出た。何時もになく今日は皆の者が不安さうで、何事か起つたやうな様子でどん／＼やつて来る。やがてサイレンが鳴つた。之も又何かを弔ふ如く靜かに哀悼の意を籠めて全校庭に鳴響いた。

校長先生が朝禮台に立たれた。僕はもどかしさうに先生の方を見たが、心の奥に何か不安などよめきを感じた。先生はやがて徐ろに口を開かれた。「我が千原先生には……」僕はもう一度自分の耳を疑つて耳を傾けて聞いてみたが、然し千原先生はもはや此の世の人ではなかつたのだ。名譽の戦死をせられたのであつた。

丁度僕が二年生の夏休の時だつた。僕が土手を散歩してゐると、後から來た友達が「千原先生が應召される。」と言つたので我と我が耳を疑つて驚いた事があつた。そして其の翌日にはもう千原先生と川村先生は我等の歌ふ校歌應援歌を後にして、車窓よりにつこり笑つて勇躍戦地へと向はれた。その御姿は私の眼底に先生の最後の印象として深く／＼刻みつけられてゐる。度々下さつた戦地よりの先生の御便りを我等は穴のあく程拜見して、先生の御姿を眼前に御想像申し上げて先生の御無事なる事を御祈りして居た。然るに突如として先生の御訃報を承つたのだ。然し先生の北支中支の戦線に御活躍中の御姿が眼前に髣髴として、僕はどう考へても夢の様な氣がしてならない。教室に於ては明朗温雅で御優しく而かも眞劍の御態度で御導き下さつて僕等の眞の先生と御慕ひ申してゐたのだ。然るに今はもうあの御優しい先生の御聲咳に永久に御接し上げることが出来なくなつてしまつた。我等は衷心より先生の御菩提を弔ふと共に、先生の御心に報いる爲先生の最後の御言葉、「至誠奉公の國士となれ」を守つて立派な人間とならなくてはならぬ。先生の御後を受け繼いで新興支那政府を助け、東洋平和を確立する事の出来る眞の日本人至誠奉公の國士とならなくてはならない。

### 千原先生を憶ふ

二年 横野 信隆

去年八月歡送式の時先生はにこ／＼として壇上に立たれたが、あの時の軍服姿凛々しい御様子が眼前に髣髴として現れた。四邊は水を打つたやうに靜まりかへつて咳一つする者もない。

「嗚呼先生」先生は本校の校訓の、生きた姿、至誠奉公の國士を如實に御示し下さつたのだ。我が校として此程の名譽が何處にありませうぞ。先生の日本刀を擱んで莞爾として笑つて居られる御寫眞、中山陵の詩の御遺墨を拜見する度毎に先生の方々の御勞苦に依りまして武漢三鎮は完全に我が手に歸しました。我等は先生が皇國の軍人として名譽の戦死をせられたのに對しまして、衷心より感謝致しますと共に此の戦捷の御報告を致します。

### 千原先生を憶ふ

三年 小川 誠一

勇姿颯爽と驛頭に立たれ我等の打振る旗の中で御軍服姿凛々しく、「諸君よ、しつかり勉強して天晴れ至誠奉公の國士となつて下さい。」と言はれたあの御言葉が、先生の我等への最後の御教訓であつたのだ。先生は「出征したからには生きては歸らぬ。」と言残されたが、それでも先生の御訃報に接すると言ひしれぬ悲しみと寂寥を覺えるのである。

昨年夏支那事變勃發するや出征將士の方々は歡呼の聲、旗の波に送られつゝ必勝を期して勇ましくも戦地へ次ぎから次ぎへと向はれた。本校關係の千原先生にも終に赤襟はきたのであつた。國家の重任、本校の名譽の爲、亦校訓たる至誠奉公の國士たるの本分を盡すべく出で立たれたる先生。兄も御世話になり又續いて僕も教へを受けた先生に一言の御禮とて御出發の前夜夏の夜もふくる頃母と兄と僕の三人は御挨拶にお伺ひしたのである。一番町のあの家、御玄關はほのぐらかつたが御聲は判然と「しつかりやつて参ります。」と母におつしやられた。翌日御出發我ら生徒や多數の御見送りの中に御元氣潑刺と御出征なされたのである。以來炎熱焼くが如き暑さ、零下幾十度の寒さの中を各地に御轉戦東洋平和の爲に身を賭して小隊長として御奮闘下され學校へも戦地の模様など度々御知らせをいたゞいた。其の間皇軍の到る處日章旗は輝き十月に入り漢口もやがてはと云ふ六日何たる運命のいたづらぞ、その今一步前にして終に名譽の御戦死をなさらうとは!! 漢口陥落を目前にさぞかし先生も残念無念で倒れられた事であらう。未だ御戦死を知る由もなく去る日の朝登校、弔旗にはつと胸つかれつゝ校内に入る何となく沈黙の色たゞよひ憂鬱であつた。そして朝禮の時に校長先生から承つた御戦死の御言葉に生徒一同は暗然としてしまつたのである。あのいつものこやかなお優しい先生は再び教壇でお會ひす